

ことばの教室や吃音について現時点で思うこと



岡 奈々子

1) きこえとことばの教室について

きこえとことばの教室には、小学四年生から六年生までの三年間通っていました。通うことになったきっかけめいたものはよく覚えていませんが、おそらく親が連れていってくれたのだと思います。ことばの教室を卒業した後は、「中高生吃音のつどい」に高校三年生まで参加していました。「吃音のつどい」は年四回開催されていますが、つどいにせよことばの教室にせよ、定期的に吃音について話したり考えたりできる場がある(場がある、というだけで、そこで実際に話したり考えたりするかどうかはまた別ですが)というのは良かったと思っています。

さて、ことばの教室で何をしていましたか?と聞かれても、正直に言ってあまり覚えていません、と答えることしかできません。発音や音読練習をしたことも何となく記憶にあるのですが、その練習が実際の生活の場面で役立つおぼえはあまりなく、練習しても良くなることはあまりないのだろう、と思っていました。あとは、担当の先生とバランスボールを打ち合いながら遊んだり、紙片をひっくり返して遊んだりしたことは覚えています。遊ぶことが楽しかったことももちろんありましたし、遊ぶことを面倒に感じていたこともたまにありました。

だからといって、ことばの教室に通ったことが無駄だったとは考えていません。どんな場であるにしろ、子ども時代に自分一人のために時間を使ってくれる人がいるというのは、とても幸せなことだと思います。どんな活動をしていたか、ということはあまり問題ではなく、そのように、自分と一対一で向かい合ってくれる大人がいて、毎週そういう時間が確保されていた、ということが重要だったのだと感じています。なので、ことばの教室に通っていたことには今でも感謝しています。

2) 大学のボート部での活動について

大学に入り、体育会系のボート部に成り行きで入部することになりました。私はそれまで完全に文化系だったのでよく知らなかったのですが、運動部というのは、他人と言葉を交わすことがとても多い場所です。チームとして全員で同じ目標を目指すため、意識の共有や統一を大切にしなければなりませんし、そのためには、毎日の



コミュニケーションを通して、お互いのことをよく知っている必要があります。ましてボートというのは「究極のチームスポーツ」と言われており、同じ舟に乗った全員が十分違わぬ同じ漕ぎをするということが重要です。その基盤になるのはお互いの信頼関係であり、信頼関係の構築と一口に言ってもそこには様々な障壁がつきまとい、とても一筋縄ではいきません。忍耐強いコミュニケーション、洗練された言葉や知性が必要です。

吃音があるということは、そのコミュニケーションをするときに、他の人と比べて越えなければならないハードルが一つ多いということです。その一つ目のハードルを越えるのにまず一苦労です。ですが、ボート部の生活を通して感じたのは、人に何か大切なことを伝えるには、吃音があろうとなかろうと、自分の持てる勇気をすべて振り絞らな



ければならないということです。自分に責任を持ち、勇気を持って、相手に伝えるべきことを伝えることの連続で、信頼関係はつくられていきます(もちろん勇気を振り絞って伝えたとこでうまくいかないこともあります)。それを大変だと感じるのは吃音者だけではなく、みな同じです。なので、吃音の子どもには、吃音を変に言い訳に使わずに、自分の伝えたいこと、伝えるべきことは、責任を持って伝える努力をしてほしい、と思っています。